



理事会だより (7・10)

一、協会報七百号記念令和7年小田原秋季俳句大会の準備状況は ①小田原市に市長・議長賞、大会出席の要請 ②七百号記念号へ市長メッセージをお願い ③小野・須田・近藤理事より外部団体へ投句チラシ配布 ④平塚俳句大会の参加状況を村場会長、小野理事より報告。① ②は長谷川副会長

二、秋の吟行会は10月28日(火) 松永記念館にて。

(総務部担当、詳細は本号10頁)

三、協会報七百号の十一月特集号に全会員の「わたしの一句」を掲載することとし八月に案内する。(広報部)

四、FMおだわらへの出演(8月17日) 要請あり、広報部へ対応一任

理事会日程 8/14 9/11 10/9

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

会議室は13時から使用出来ます

「俳句おだわら」10句抄 (695号より)

一ノ瀬茂代 抄出

青嵐や一本道に出会いあり  
ぶらんこの少年青い風に乗る  
花は葉に背にまだ固きランドセル  
川音の初夏となりたる一日かな  
傍らに猫の控へて仏生会  
残る鴨水尾も引かずにより来たる  
朝刊のストンと落ちて立夏かな  
木の芽風一竿で足る濯ぎ物  
さざはしをけんけんぱーと栗の花  
春愁ひ湯呑みに残る茶洪の輪

伊藤道郎 抄出

北窓を開くウクライナはあの辺り  
ふらここをぐんぐん漕げば無敵なり  
ぶらんこの少年青い風に乗る  
夕焼雲世界の空は一続き  
春の雨森羅万象動き出す  
郭公や日暮れ澄みゆく樺林  
朝刊のストンと落ちて立夏かな  
手話の子の光る手のひらシャボン玉  
唇に触れれば火傷さくらんぼ  
鷹女忌の独り法師や半仙戯

鈴木 陽子  
豊田 幸枝  
加藤かほる  
石井千代子  
西賀 久實  
守屋 まち  
新井たか志  
田中 幸子  
小林永以子  
出澤 洋子

長谷川きよ志  
加藤 健治  
豊田 幸枝  
小野 菊土  
中根登美子  
中山智津子  
新井たか志  
のがわきいち  
佐々木重満  
小島ノブヨシ

小澤 純子

風もまた疲れを知らぬ鯉のぼり

門松 鳳文

幼き日々の体験を連作にされた中の一句。近年は私達が子供の頃に体験できた事がめつきり減ったように思う。高空にゆったり泳ぐ鯉のぼりの姿や、外遊びをする子供達をあまり見かけなくなり残念である。

高々と泳ぐ鯉のぼりは五月の風物であり、見る人も元気にしてくれる。この句では、「風」に視点を置いたところが素晴らしいと思う。脇役の風の活躍で主役の鯉のぼりが大変引き立てられている。

新緑の風に五体を泳がせる

加藤 春江

托鉢の鉢に消えゆく春の雪

加藤まり子

蟻の列へそ曲がりいて乱れけり

加藤れい子

寝落ちたる子にまだ送る団扇風

神山つとむ

天界はまだまだ遠し揚雲雀

川合 昌子

禅寺の闇立ちあがる虎落笛

川本 育子

霜の夜や兄と競ひし七並べ

河本 純子

啓蟄やほほをなでゆく風やさし

河本チヨ子

清拭の湯気の優しきクリスマス

菅野 英余

大津絵の鬼の目ン玉冬に入る

北村 文江

梅匂うそしてひとりの夜が来る

木村 和彦

小野 菊土

また一つ父に嘘つく秋の雲

菅野 英余

子供の嘘なら理由が透けて見えて可愛いが、大人の嘘には何か大きな裏がありそれを見るのが恐い。憎しみからの嘘、愛情ゆえの嘘、この句は後者かと。嘘をついた人もつかれた人もお互い分かっているそれでも平常心を装う。秋の雲に一層のものの悲しさを感じます。他に楽しい句が沢山あったのにこの句を選んでしまいました。身内の別れを思い出したからかも。

これからは明るい句を沢山作って楽しませて下さい。

万物の目覚めの序奏二月光

加藤 春江

夏萩やはんなり返す京ことば

加藤まり子

日の暮れは人声恋し煮大根

加藤れい子

幾つもの西瓜を叩き一つ買ふ

門松 鳳文

さくらんぼ摘む青空をかたむけて

神山つとむ

カナカナの悲しいほどに澄んだ声

川合 昌子

春の雷金平糖を噛み砕く

川本 育子

霜の夜や兄と競ひし七並べ

河本 純子

はかま穿く娘らの姿よ春を呼ぶ

河本チヨ子

つくしんぼ光のやうな一行詩

北村 文江

新玉の富士の息吹か雪煙

木村 和彦

庄司 下載

八月の存心新に緋のカンナ

西賀 久實

掲載句二十句を通して、一貫した詩情が選び抜かれた言葉で穏やかな調をもつて詠まれている事に驚かされる。揚句の八月の存心と言えば終戦に関する思いであり、それを新にした今後への決意でもあろう。緋のカンナは焼け野原に実際に咲いていたのか、将来への決心の象徴として心象なのか。いずれにせよ、焼け野原のモノクロの背景のなかで、その鮮烈な緋色が作者を強く突き動かしているのである。

銀やんま牛舎に牛のゐない昼

木村 幸枝

野にひびくほどの嘔や畑仕事

久保寺トミ子

点滴の針にさされつ蚊にささる

神野美代子

誰かまた斃れし夜や桃の花

小島ノブヨシ

掌に取れば温もり嬉し寒卵

小瀬村信子

話し相手はしくて金魚太らせる

小林永以子

雑煮食ふ生き方違ふ三姉妹

小林 環

西日背に高校球児泣き笑い

小早川のぞみ

春月や父の手蹟の千字文

近藤 久江

かなかなの森深くして神近き

齊藤 桂

花野来て目元すずしき馬に合う

齊藤 静

田中 幸子

長恨歌書き継ぐ春の夕べかな

近藤 久江

唐の詩人白居易の叙事詩長恨歌。玄宗皇帝の寵愛を受け栄耀栄華を極めた楊貴妃も戦乱に散った。天に在らば比翼の鳥地に在らば連理の枝と為らむ天長久時有りて。二人は決して離れまいという永遠の誓いが、天地は悠久であるが人の世ははかない。

七言120行から成る長恨歌を春の夕べに書き継ぐ書家久江さん。「春の夕べ」が動かない。感動の一句です。いつか作品を拝見したい。

唄つてる埴輪の口や秋惜しむ

木村 幸枝

身になじむ木綿の野良着秋涼し

久保寺トミ子

今はもうひとり花野を夢の中

神野美代子

墓のそり坐骨神経痛を病み

小島ノブヨシ

日向ほこ天国というガラス窓

小瀬村信子

言へないこと言へて白菜真つ二つ

小林永以子

制服の少し大きめ朝桜

小林 環

宿題の終わらぬ子ども夏座敷

小早川のぞみ

虫すだく夜なり無用の電話して

西賀 久實

しゃぼん玉太平洋の風にのる

齊藤 桂

少年の真白な会釈衣更え

齊藤 静

俳句おだわら（7・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（6・20）

久江報

夕さりの螢袋に灯の点る

足立 和子

輕鴨の親子の睦ぶ用水路

川本 育子

明易し百の人生走馬燈

高橋 小糸

短夜や水になりたる心地して

湯浅 義幸

青々と実梅押し合ふ朝かな

近藤 久江

◆山北（6・26）

由里子報

糖床の手にやわらかき薄暑かな

和田恵美子

妹来る上り框の夏野菜

星 一義

六月の陽ざし樹海を下るバス

石田加津子

大小の上履き干され青田風

竹下由里子

◆香雨・梅ごち（6・22）

忠山報

日めくりの半分減りて梅雨に入る

肥後ちさこ

土といふ土は砂漠化旱梅雨

関戸わよこ

棟梁にひと声かけて三尺寝

門松 鳳文

けふ降るを待ちゐる庭の四葩かな

吉田 百代

沢音を聞きて一服登山道

吉田 康雄

駅と駅つなぐ農道たちあふひ

陌間みどり

青梅雨や古刹は深き黙の中

小澤 純子

虹といふりボンのかかるループ橋

池田 忠山

◆こよろぎ（6・20）

つとむ報

繰り言を古いゆく母とところてん

大澤 紀子

青い目の箸を巧みにところてん

高杉掘三朗

少年の口笛高し大夕焼

植松テル子

飲みごろを舌にのせたる一夜酒

神山つとむ

◆沈丁（6・5）

寶子山報

ひとり寝の灯に浮ぶ水中花

若村 京子

水に生き水の精なる水中花

柳澤ミサ子

足し水に楚楚と揺れたり水中花

田中 恵一

恐ろしきこの世を照らす水中花

河本 純子

生きるのはアナログ派です水中花

勝木 澄子

最終章始まる夜半の水中花

菅野 英余

緑陰や八百年のパワー受け

高井 幸子

七夕や心に吊るす願ひごと

片野 節子

水中花一人遊びの上手な子

峯尾ユキエ

背泳ぎの風が気になる水中花

清水美代子

水中花見透かされてる下心

松下 俊之

涼風<sup>すずかぜ</sup>やかりゆしゆかし慰霊祭

武居裕美子

枯れもせで疲れてをりぬ水中花

森田 久江

リビングの色どり楽し水中花

川瀬 芳子

廃屋の窓辺色濃き水中花

鈴木 陽子

散骨や水を得て咲く水中花

神田 征夫

部屋干しのデニムのシャツと水中花 寶子山京子

◆みなみ(6・20) かほる報

雨蛙競い鳴きして雨を呼ぶ 市川めぐみ

出目金の退屈そうな泡一つ 豊田 幸枝

老いてなほ粹な着こなしうす衣 齊藤 静

軒下で育った燕ツイーツイと 小瀬村信子

さくらんぼふむ少女の多くほかな 加藤 健治

梅雨晴れ間眩しき日差し刺さりくる 柳川 紀枝

天狗道木漏れ日のせる齒朶若葉 加藤 富江

大の里雲竜型の夏土俵 川上 靖子

目高飼う漠寡黙に餌与う 加藤かほる

◆青梅(7・9) 幸子報

夏の夜の空を仰いではは想ふ 大塚 行人

炎暑なり踏ん張つてをり仁王像 加藤まり子

日盛りや午後の予定の鎌を研ぐ 久保寺トミ子

緑陰や五臓六腑の丸洗ひ 田中 幸子

◆春野(6・15) きよ志報

老いらくの恋の色とも額の花 伊藤はる子

蚊の音に平らな闇を奪はるる 内田知江子

剃刀の草砥の光る我鬼忌かな 尾崎 一夫

手枕に頭蓋おもたき螢の夜 瀬戸 悠

端境期の庭十葉が匂ひをり 二見 和江

春の宴鳥獣戯画の帯締めて ミステウレッタ弘美  
賞味期限切れし紫陽花巡りかな 長谷川きよ志

◆実のり(7・16) たか志報

誰彼と逝きし故郷や桐の花 荒井ちゑ子

青葡萄夕日を集め輝けり 岩本ひさみ

麦秋や刈り取る人もなき戦地 杉本 久子

おさな児の直だんぱんや蝸牛 木村 幸枝

名刹の静けさかくも落し文 新井たか志

◆鷹(7・4) 十五報

胸像の並ぶロビーや盆狂言 青木 孝子

合歓の葉の閉ぢて子を呼ぶ母の声 池田 令子

蔵壁にのこるひのいろ百日紅 佐宗 欣二

よく通る介護士の声五月晴 中田 笑子

オカリナの調べ田を越え五月晴 山崎美知子

新緑や鉄棒に伸ぶ小さき手 石川 州洋

棟札に我が名記せり風薫る 庄司 下載

曝涼や朱の鮮らけき所蔵印 瀬戸 りん

釘を抜く踏張りどころ日の盛 高橋久美子

エプロンの草の染み抜く夕焼かな 中山智津子

涼しさや望遠鏡に土星の環 齊藤 桂

晨光を受けし片唄やほととぎす 芹澤 常子

早起きの旅の毎日花ゆうな 深澤 一華

潮の香の古き駅舎に夏の蝶

高齡者さがす放送夾竹桃

教会の白壁照るや夏燕

幼子の内緒話や茄子の花

辣韭をすすぐ田川の水明かり

薫風や甥の縁談まとまりぬ

噴く汗や吹いて名古屋の味噌煮込み

地下足袋を軒に吊すや杣の夏

朝蟬や砥石は水に息を吐く

岩国の白蛇眠る目を開けて

透百合父の墓前に誓いけり

四葩咲く風の吊橋渡りけり

甚平や空のくれない濃くなりぬ

御先祖に詫び盆棚をこぢんまり

じやんけんは素手の勝ち負けソーダ水

### ◆零 (7・17)

俳句のこと油絵のことビヤホール

紫陽花の水孕むころ母を聴く

辞世込め祖母から孫へ沖縄忌

氷菓飲む「キュン」と一瞬の青春

支え合いたどり着きたり紫陽花園

8歳の旅立ち悼む大夕焼け

松岡美和子

大島美恵子

加藤 幾代

高橋千代子

米山 翠

來田 新子

青山 典仁

大沢 年子

小林 環

澁谷 明子

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

守屋 まち

村場 十五

史郎報

青木たけを

伊藤 道郎

佐藤 正子

中村 裕子

のがわきいち

本多登美子

合歓の花一度も聞かぬ母の愚痴

### ◆草むら (7・18)

赤茄子や弾けるやうな陽の恵み

目も耳もみみずは神に奪われし

蟬捕る鉄腕アトムや焦土跡

### ◆おほる (7・19)

地球なほジュラ紀忘れぬ溽暑かな

関税へ疑心暗鬼のやぶからし

青田風猫が留守居の駐在所

米作り明日へ繋ぐ青田道

晩学や青田の風が通り過ぎ

青田風煩惱一つ運びおり

対峙して堂々めぐり草むしり

夏草の踏ん張る力土の声

青田風雨後の山河と光り合い

被爆者の幻影見えて水を打つ

刺のある紫紺の茄子の曲線美

大空へ白い旋律夏の雲

一筋の風吹く青田騒めきぬ

寄り道や青田の風を一人じめ

青田風受けて走るや御殿場線

青田波今日の平らを明日へと

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

佃 悦夫

佐々木重満

きよ子報

横塚 昌平

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

加藤 春江

瀬戸とみ子

高橋みどり

中根登美子

中村 昌男

中津川晴江

廣田 悦子

原 仁子

松良 榮美

安池 利枝

二上 光子

石井きよ子

◆無所属

天花粉六十の子の母子手帳  
 夕焼けや荷台のウンボにも給油  
 病む人の白き手の平さくらんぼ  
 「熊出ます」立て札背にし根曲がり竹  
 草いきれ草生す屍死語なれど  
 スーチャーさん幽閉の地の青き蛇行  
 崖つぶち洗濯物がよく乾く  
 虫時雨りんがちゃがちゃすいっちょん  
 地球の地削りて永遠に滝落つる  
 紫陽花の枯れゆく村やセピア色  
 無責任な迷走毛虫焼きにけり  
 落梅や水の流れに浮き沈み  
 生や死や空を泳いでゆく金魚  
 ミツバチの刺客とならむ我が身かな  
 吊り替えて風鈴の舌甘やかす  
 翡翠去り水面に仄か彩残す  
 墓のそりテーマパークはどのあたり  
 ドラマなら思ひ出の夏に the end  
 水馬すいすい澄ましづらになり

小林永以子  
 畠 梅乃  
 一ノ瀬茂代  
 出澤 洋子  
 山本 すみ  
 大石 雄介  
 大石 和子  
 大佐田うづき  
 岩楯恵津子  
 岡田 典代  
 瀬戸 正洋  
 山田 照子  
 須田 聡子  
 北村 文江  
 小澤 園子  
 田畑ヒロ子  
 杉山あけみ  
 杉崎 せつ  
 小島ノブヨシ

俳句おだわら鑑賞 (令和7年5月号)

澁谷明子

介護する我も足弱春あられ

守屋 まち

現代は長寿社会である。とはいえ介護なしでは生きられない人も多い。誰しもが動けなくなる日がやってくる。家庭内で成り立てば理想ではあるが、介護離職や介護施設の倒産といった問題もある。掲句から自分も身体的に大変であるが、懸命に介護する姿がうかぶ。春のような長生きの喜びとあられのような厳しい現実を下五から感じました。

杉本久子

遠足やグリコのおまけ見せ合うて 青山 典仁

子供達にとって遠足は楽しいものです、特に小学生の時は。前日もワクワクしてお菓子を買いに行ったのです。その時決まって持っていくお菓子がありました。それはパラソルチョコでした。それは甘くて夢のお菓子でした。

作者はグリコのおまけを遠足に持っていき友達と見せ合った楽しい思い出を一句にされましたが、その様子が思い浮かびます。楽しかったあの頃が懐かしく甦る一句でした。

## 足立和子句集

### 「一本の道」鑑賞

近藤 久江

足立和子さんは、子育ての時期より俳句に親しみ、現在まで真摯に向きあっておられる。日常の生活の中で見聞きしたものや感じたこと、己れのつぶやきなど過去の俳句を句集「一本の道」としてまとめられた。

句友のひとりとして、作者の歩んで来た心の叫び、思いを私なりに受けとめ鑑賞した。特に胸に響いた句を各章ごとに抄出し、最後の句については私の感想を簡単に書いてみた。

#### 一章 子供成長期

シンガポール

出迎への夫ピカピカ夏立ちぬ

耳病んで音のない世や冬薔薇

羽拔鶏肩いからせて女来る

羽拔鶏の句は、辛いこと苦しいことに涙を見せずに、自分をしっかり持って歩んだ作者の姿を窺わせる。

#### 二章 曼珠沙華

破れ蓮沼の深さを知りつくし

虫が虫背負ふ水際木歩の忌

子と一度落としてみたや蟻地獄

お茶の花餅もんべも滅びゆく

逆らはぬ心貫き曼珠沙華

曼珠沙華の句は、まさしく昭和の女の悲しき、強さを詠んでいる。現在の世では通じないことかもしれない。嫁としての辛抱強さは当時は当り前のことだったのかもしれないが、でも悲しいと私は思う。

#### 三章 命のビザ

舞殿に恐れを知らぬ雀の子

苔の花水のいのちを輝かす

梟の森は大きな知恵袋

心根に一日一生初日記

初日記の句は、新年を迎えての作者の生きざま、信念を込めて詠んでいる。作者のこの一年の一日、一日への思いの強さを読みとった。

#### 四章 月の貌

藤の花風を聴きある祖師のこゑ

炎天や江戸の古地図の一里塚

植田中ころ次第に透けてくる

泥掴み水を掴んで田植かな

田植の句は、田植の経験のない私には、田植は大変

だという思いだけだが、泥掴み水掴みのフレーズがその作業の大変さを力強く的確に描写している。

絵らふそく灯せば涼しははの顔

昭和の女の一人として、ここで「はは」と詠まれているお姑様には、日常の相談相手としていろいろ教えてもらい学んだ日々を過ぎてこられたことが窺われる。故人となられた今でも、絵蠟燭を灯し偲んでおられる作者のやさしさを感ずる。

作者はあとがきに「夫と二人の街道歩き」と書かれ、旧東海道の五十三次を日本橋から三条大橋まで二人で五年をかけて完歩したと書かれている。句集にもその過程でのおりおりの句がちりばめられている。

東海道西へにしへと日の永し

さはやかに宿場路面の青海波

老舗守る小田原提灯月朧

清清しどの橋からも五月富士

靴ひもを緩め丸子のとり汁

道中で詠まれた句は他にもたくさんあるが、ご主人とおふたりで旧東海道を歩き通されたという素晴らしい共同作業に敬意を表して締めくくりとしたい。

## 城苑俳句・秋の部

(合同句集第十三集より近藤久江抄出)

虫鳴くや今日も一人の夕御膳

鈴虫や風止み空へ澄み渡る

試合後の自由の時や草の笛

新蕎麦やポツカリ空いた父の椅子

風鎮のことりことりと秋深し

百均のさばてんの棘秋晴るる

名月や母の遺せし舞扇

案山子達道案内にかり出され

稜線のもつと向こうに秋の空

ゆるぎなき色となりたる秋の茄子

足柄の里に風韻萩揺るる

湯殿への木の橋渡る星月夜

まぶしさはさびしさに似て花野径

菊人形小袖ふれなば匂いたち

青色の洗濯バサミ秋うらら

捨案山子夜すがら星に語るらし

ひたひたと波の寄せくる秋の暮

さざ波の尽くることなき水の秋

早朝の廊下拭きをり涼新た

遠見富士金木犀の咲き誇る

人去りて花野は無口となりにつけり

松良 榮美

松下 俊之

蓑宮 わか

峯尾ユキエ

村場 十五

百川 秀子

守屋 まち

安池 利枝

柳川 紀枝

柳澤ミサ子

山崎 悦子

山崎美知子

山田 照子

山本 すみ

湯本とし子

横塚 昌平

吉田 百代

吉田 康雄

米山 翠

來田 新子

若村 京子

心地良き縁側の黙いわし雲  
集會に配るおむすび豊の秋  
新酒酌む自慢話は山と水  
木漏れ日の奥に木漏れ日本の実降る  
天も地も風透き通る秋の暮  
胡桃落ちふりむけばまた胡桃落つ  
あかときの色を宿して芋の露  
竹の春愚痴聴き地藏のこゑ明し  
御縁とは不思議なものよ星月夜

和田恵美子  
青木 勝子  
青木 孝子  
青木たけを  
青山 典子  
青山 典仁  
秋山 昇  
足立 和子  
新井たか志

## 肥後ちさ子

### 病室の明るき黙や花の雨

瀬戸 りん

ご自身が入院中か、若しくはお見舞いの時の一句と推測。病室の窓越しに静かに降りつづく花の雨をぼんやり眺めている作者。ともすると沈みがちな気持ちを作者は「明るき黙」と表現。その措辞により作者の心が前向きであると想像でき読み手の心もほっこりと和む。季語「花の雨」が作者の心情にそっと寄り添ってくれているよう。

来年は楽しいお花見ができますようにお祈りしています。

## 秋の吟行会のお知らせ

日時 令和7年10月28日(火) 雨天決行  
吟行地 松永記念館展示室、記念館周辺の神社仏閣  
句会場 松永記念館本館2階

小田原市板橋941の1 ☎0465・22・3635  
箱根登山線箱根板橋駅から徒歩10分、駐車場あり

会場利用時間 (11時から)

受付 11時半から 句会費五百円

句会 13時から 投句・囁目3句(締切12時半) 5句総互選

\*各自周辺吟行、句会場で食事可。

\*事前申込の必要はありません。お仲間(会員以外も可)をお誘い合わせの上現地に集合下さい。

総務部 問合せ(伊藤 090-9204-9232)

佐々木 080-1247-8878)

### \*七百号記念号への投句のお願い\*

小田原俳句協会報は、今年の十一月号で七百号を迎えます。この間の会員の皆さまのご支援ご協力に御礼申し上げます。つきましては、十一月号を記念号として現会員の「わたしの一句」を掲載致します。記載要領(全員に配布)によってご提出下さいますようお願いいたします 提出締切 十月十五日

(広報部)